

2023 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 氏名 酒井 湧矢

〈 研修概要 〉

2024 年 2 月 25 日から 3 月 7 日までベトナム研修に参加しました。チョーライ病院では臨床実習、フエ医科薬科大学では国際交流プログラムと附属病院での臨床実習を経験しました。

〈 研修参加の目的 〉

私が本研修に参加した目的は、異なる環境や考え方に触れることです。異国の地で自己の浅識や未熟さを知り、多角的な視点を養い、視座を高める機会にしたいと思いました。そのために、日本とベトナムの医療環境の違いを理解することを重視しました。自国だけでなく、他国の医療の現状を理解し、より広い視野から物事を見る能力を養うことを目指し、今回の研修に臨みました。

〈 チョーライ病院での実習 〉

2 月 26 日から 3 月 1 日までの 5 日間はチョーライ国立病院で病院実習を受けました。日本の実習と同様に、単純 X 線撮影・CT・MRI の研修を受け、日本とベトナムの医療の違いを目の当たりにしました。



▲ 集合写真



▲ 実習の様子 1

CT や MRI は日本の病院と同性能の装置が導入されていますが、床で人が横たわるなど、院内の清潔とは言い難い状況に医療機関への過度な患者集中による影響を感じました。ベトナムの医療体制は第一次（コミューン・郡レベル）・第二次（省レベル）・第三次（中央レベル）の三層で形成されています。しかし、第一次、第二次レベルの医療機関に対する患者の信頼は低く、第三次レベルの医療機関に患者が過度に集中しています。特にチョーライ病院は、経済的な格差に関係なく、患者にとって受診できる最後の砦とされているため、多くの患者が全国から集まり、院内の混雑と清潔さを維持する上での課題が生じています。また、患者の数に対して装置数が不足し、患者接遇よりも回転率が重視される状況でもありました。あまりの多忙さに、ポジショニングの精密さやアクセサリーの取り外しなどに配慮できない場面にも遭遇しました。また、ベトナムの病院では、実習生も検査に直接参加し、実習生だけで検査を行う場合もありました。また、日本ではまだ普及していない診療放射線技師の穿刺

が、ベトナムでは一般的に行われていました。ベトナムでは HIS や RIS の普及が進んでおらず、患者情報の管理は全て手打ちで行われています。これは効率性だけでなく、安全性にも問題があります。撮影した写真をフィルムとして患者に持ち帰らせ、別の病院を訪れる際に持参する必要があることから、まだ CD-R などの物理的メディアを用いた画像データの共有が多く行われている日本と同様に、病院間での画像伝送システムが十分に整っていないと感じました。医療 ICT 導入が進んでいない最大の理由は、保健省予算の制約により医療 ICT に投資できない病院が多いことです。しかし「ベトナム電子政府計画」には、保健医療サービスにおける IT の利活用の推進や、遠隔医療等が挙げられているほか、中央と地方の行政機関等を結ぶ情報ネットワークの整備が打ち出されており、医療 IT システムを導入していくための基盤整備と意欲が見られています。また、検査の予約待ちが非常に長く、例えば唾液腺癌の患者は6ヶ月待ちという状況があり、その間に癌が進行していました。

この研修を通じて、医療の現場で直面する課題の多様性を再認識することができました。今後、診療放射線技師として、患者中心の視点を持つことの大切さ、また医療情報技師としてシステムの導入や改善による効率性と安全性の追求の重要性を強く認識する機会となりました。ベトナムの医療現場を目の当たりにしたことで、日本とは異なる環境での医療提供の課題と努力を理解することができました。

〈フエ医科薬科大学での実習〉

3月4日から3月5日までの2日間はフエ医科薬科大学病院で病院実習を受けました。チョーライ病院とは異なり、実践的な経験を得ることができました。

最初の重要な経験は、友人がファントムに対して穿刺の練習をしたことです。他の学生より一足早く穿刺の仕方を教わったことは、非常に有益な経験となりました。今年、穿刺の技術を学ぶ身として、このような実践的な経験を得られたことは、大変貴重であったと感じています。次に、単純X線撮影の業務を実際に体験したことです。患者の情報(番号8桁、名前、歳、性別)を手打ちで入力し、部位を選択、ポジショニングが完了し扉が閉まったら照射スイッチを技師の方が押す。この実践的な経験を通じて、将来、技師として働く際のイメージが鮮明になりました。また、日本での実習において、ベトナムとのシステムの違いを深く理解し、それを観察することで、国際的な視点を持った技師となり、医療技術の向上に貢献したいと思っています。最後に、患者さんのポジショニングを経験したことです。日本の実習では、見学することしかできなかったため、これも学び多き経験でした。胸部撮影の声かけの内容やポジショニングは日本と同様だったため、次の日本での実習でもこの経験を活かすことができると思います。



▲ 実習の様子 2



▲ 穿刺の練習



▲ 患者情報の入力

〈 交流 〉

チョーライ病院のスタッフやフエ医科大学の学生たちとの交流会では、食事を共にし、会話や歌で楽しい時間を過ごしました。実習後はフエの学生たちとバイクで移動し、共に昼食をとり、観光地を巡ることで仲を深めました。英語に自信がなくても、ベトナムの人々は理解しようと努力してくれ、私たちのコミュニケーションへの恐怖心は次第に薄れていきました。「完璧な英語である必要はない」ということに気づき、シンプルな単語やジェスチャーを交えたコミュニケーションで、互いの心を通わせることができました。この交流は、私たちに「英語は度胸」という教訓を理解させ、失敗を恐れずに挑戦する勇気を与えてくれました。



▲ フエの学生達との昼食



▲ フエの方達との写真

〈 まとめ 〉

今回の研修で、両国の医療の現状や課題を知ることができました。特に、ベトナムの医療環境の厳しさや患者ケアの欠如に衝撃を受けました。これは、患者中心の視点を持つことの大切さや、システムの導入や改善による効率性と安全性の追求の重要性を強く再認識する機会となりました。その一方で、技師の方々がその困難な状況の中でも冷静さを保ち、確かな技術で対応している姿に、深い感銘を受けました。限られた時間やリソースの中で最大限のケアを提供するための工夫も学びました。

〈 謝辞 〉

この度は、ベトナム研修において多大なるご支援とご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。チョーライ病院の皆様、フエ医科大学の皆様、引率して下さった先生方、そして研修の企画・運営に携わった皆様のおかげで様々な学びの機会を得ることができました。この研修を通じて、診療放射線技師としての自覚と責任感を強く持つことができました。今後は、この経験を活かし、日本の医療に貢献できるように努力してまいります。本当にありがとうございました。